

地球の木

♥地球上のすべての人たちと共に生きたい



誰がために 鐘は鳴る

プロジェクト担当理事 米林大作

今年の夏、フィリピン・ネグロス島から非日常的な魅力あふれるラリーさん（PAP21スタッフ）がやってきて、金沢八景で青少年のワークショップが行われた。といってもらいさんをご存知ない方が多いと思うので、少し背景を説明する。ネグロスへの青少年スタディツアーは今まで7回実施され、3回目というリピーターも含め、延べ36人の若者が参加してきた。ネグロスでの1週間のワークショップは支接地の若者と合同で行うのが慣例となっている。そこでラリーさんはファシリテーター役として、劇・絵・楽器を駆使してワークショップを進め、はたまた料理まで作ってしまうという八面六臂の活躍をする。今回は日本で1泊2日の短縮型ワークショップをやってみようということになった。参加者の少なかったことは残念だったが、以前ネグロス青少年ツアーに参加した若者たちが一体となって充実したワークショップが実施できた。そして、若者の心にはほのほのとしたボディブローのような思いを残し彼は帰っていった。ラリーさんが今回のワークショップなどを通して感じたことは「自己中心的でコミュニケーション不足の日本」ということのようにだ。

今回のワークショップでは、ネグロス青少年ツアーに参加したことのある若者に、企画や運営を手伝ってもらった。10年前のツアー参加者も含め、8人がワークショップ、会計、料理、生活、コーディネートなどの担当を快く引き受けてくれた。私はうれしかったと共に、ネグロスでの青少年ツアーの体験が、それぞれの若者の心に残したものの深さを

<地球の木は、フィリピンで「レッツ・ゴー！ファミリープロジェクト」（家族型農業）を支援しています。>

CONTENTS

- 誰がために鐘は鳴る……………1
- ネパール調査報告……………2～3
- フィリピン・ラオス・カンボジア……………4～5
- マジカルバナナ海を渡る！……………6
- ラリーさん、また会いましょう……………6
- 共生の街サンフランシスコから……………7
- ヨッコのグローバルeye……………7
- 活動報告……………7
- INFORMATION……………8



筆者とギターを弾くラリーさん

あらためて感じた。ツアー参加者のほとんどがツアーで感じることは、ネグロスの若者が自分の将来と結びつけて、自分以外の人のことを考えていることだ。そしてやさしさ、暖かさ、老若男女ハロハロ（ゴチャまぜ）なコミュニティの面白さ。それにひきかえ日本では家庭崩壊、コミュニティ崩壊、生き馬の目を抜く忙しい社会で、若者はシリムチを当てられ走らされている。高学歴で自分の商品価値を高め、自己の満足のために生きる。他人のことを考えるなんて嘘っぽい。そんな生活に慣れてきた若者がネグロスへ来て、自分たちの「心の貧しさ」にショックを受けてしまう。

私たちは発展により、豊かでゆとりのある社会がやってくることを夢見ていた。しかし技術革新はそれぞれの専門に特化した部品の人間をつくりだし、情報ツールの発達は、心のコミュニケーションを失わせてきた。生産者は unnecessary 需要をかきだて、消費者は大量消費をすることで豊かさを実感する。そして世の中では「改革、改革」と大きく叫ばれ、相変わらずマネー至上主義の経済発展に振り回されている。このような状況が人間性を失わせ、疑心暗鬼で暴力的な社会をつくりだしてきた。これらのことは青少年や子どもたちに強い影響を与え、多くの問題となって大人たちに警鐘を鳴らしている。「支援と共に自分たちの生活を見直そう」という地球の木の活動は、ますます真価を問われている。

■ラリーギリエマ■

37才。フィリピンネグロス島在住。デザイナー、画家、俳優、ミュージシャンとして活躍している。関連記事がP5、P6に掲載されています。

2005年度ネパール調査報告

ネパールチーム 乳井京子

Kingdom of Nepal



ニルマラさんのお母さんがお祭りの揚げ菓子（セル）を作っている

今回のネパール調査の日程は10月29日から11月5日で、「ティハール」という光のまつりのシーズンにかかっていました。ネパール訪問は今回で10回目になりますが、「ティハール」の時期に一度行ってみたいと思っていました。ネオンや明かりの少ないネパールだからこそでしょうか、真っ暗闇にチカチカ点滅するイルミネーションはおとぎの国のようでした。また、この時期はネワール族のお正月でもあり、現地パートナーSOARSの顧問、シュレスタさんのお宅に招かれ、ネワール族の家族を大切にしている伝統に接することができました。膝を交えてじっくり話すこと、互いの文化を理解しようとするのがとても重要であるということを経験して、以上に感じた調査ツアーでした。

★ 極西部では ★

ローカル・スタッフのアルジュン・チョーダリが極西部から2日掛けて出て来てくれたお陰で、カイルリ郡の現状を聞くことができました。バンコクで1泊してカトマンドウ入りした私たちの方がアルジュンよりも早く着くなんて、やはり、カイルリ郡はまだ西の果てなのだなあと再認識しました。



ティハール祭では姉妹が兄弟の額にティカをつけて祝福する

カイルリ郡では、2005年度の識字教室がいつもよりちょっと早く、2~3月にスタートしました。諸物価高騰のため、予定していた10クラスを8クラスに減らさざるを得ませんでした。灯油の供給が止まり、夜間クラスのランプ用の灯油を入手できなくなったので、重油を使っているようですが、局面を打開するため、アルジュンは新たな方法を模索しています。それは、「昼間にもっと多くの村人たちを招いて行う、月に2回のフォーラム」です。そこで、保健、人権、環

境、教育、貯蓄などのテーマを扱った方が、今のカイルリ郡の状況を考えると効果的かもしれない」と2度フォーラムを開催してみたそうです。

今回、SOARS代表のニルマラさんとシュレスタさんが口をそろえて言っていたのは、「カイルリ郡で活動を続けていけるのはアルジュンがいてくれるお陰で、私たちはアルジュンのこと、そして、すべてのNGOが撤退したカイルリ郡で活動を続けていることをとても誇りに思っている」ということでした。マオイスト（反政府武装組織）の監視が厳しく、よそ者は村に入れられないそうです。しかし、村の人々にとって怖いのはマオイストよりもむしろ政府の治安部隊の方で、口が立つ人は「マオイストの訓練を受けたのだろう」と嫌疑をかけられるのだそうです。アルジュンは、朝の6時から10時まで、カレッジで勉強しているというだけあって、英語も随分上達しており、「末は極西部のポリティカル・リーダーに」とニルマラさんが期待するのも肯ける、素直な若手リーダーに成長していました。

地球の木のNPO設立記念に寄贈したコミュニティ・センターは、識字教室、各種トレーニングや会議などに使われており、「出張保健所として貸し出してほしい」という政府からの申し出を断るほど頻りに利用されていると聞きました。1月に始まる予定の農業トレーニングも同センターを使って実施されます。今年度は季節をずらした野菜づくりの研修が行われます。



極西部の様子を説明するアルジュン



ティハールで賑わう繁華街。
中央はニルマラさんと同行者の堀さん

★ ★ ★ イマドール村では ★ ★ ★

私たちが到着した日、イマドール村の人材育成センターでは、ワールド・ビジョン・ネパールによる人権をテーマにしたトレーニングが行われており、60名くらいの参加者が会場を埋めていました。人材育成センターはカトマンドゥ市内から30分ほどですが、テンパー（小さな三輪バス）の便数が少なく、いつも乗客で込み合っているため、外部からの利用者を増やすのはなかなか難しいようです。しかし、地元の青少年たちは毎土曜日センターに集い、元気に活動しています。私たちの滞在中も、ユースクラブがクイズ・コンテストをやっていました。高校生、大学生らの運営委員がクイズをつくり、少年少女たちがグループに分かれて真剣に答えていました。クイズの内容は、政治あり、ジェンダーありで、レベルの高さに驚かされました。ユースクラブの青年たちは、いつ会っても、とても礼儀正しく、真摯な態度で、小さな子どもたちに対して優しく、地域に貢献したいという熱意が感じられます。日本の若者たちにぜひ会ってほしいと思います。

青少年の育成に
熱心なニルマラさん



ユースクラブが近隣の村々だけでなく、遠い村々にも広がっています。イマドール村でユースクラブの活動に参加したアルジュンが、極西部のニムデイ村にユースクラブを創り、周りの地域に広がっています。人材育成センターを利用する人々もユースクラブのメンバーに触れ、「自分たちの村にもユースクラブを創ろう」と帰っていくそうです。

★ ★ ★ 女性グループは ★ ★ ★

マオイストと政府軍の内戦が激化し、極西部での活動が続けられなくなった2002年、SOARSはニルマラさんが12歳から活動を続けてきたイマドール村に活動の拠点を絞り、人材育成センターを建設しました。女性とNGOと青少年のエンパワメントを目指し、トレーニングや支援活動が行われてきましたが、未だ古い因習の中に生きる女性たちを活性化し、協同組合づくりにまで発展させるには多くの障壁

があるようです。第1に、女性たちは自由に使えるお金をもっていない。第2に、パパッド（スナック）作りや石けん作りのトレーニングを受けて製品を作っても、インドや中国からの低廉な商品に太刀打ちできず、1回目は知り合いが買ってくれても、2回目からは売れないのが悲しい現実だそうです。イマドールの消費者側に女性たちの起業活動を支える購買力がないのです。失敗を繰り返すうちに女性たちは委えてしまう。かといって、事業を拡大し、生産力を増すには、もっと多くの資本が必要です。協同組合の登録料など諸経費が高いことも、全国的に協同組合がうまくいかないハードルとなっているようです。

この話を聞いて、ちょっとがっかりしたのですが、それでも、今回出会った女性たちの中には、SOARSのトレーニングを3回受けて、村に出来た4つの女性グループのうちの3グループの代表をし、野菜や生糸を作る活動を展開している元気な女性がいました。グループを結成したばかりという若い女性たちは、彼女の豪快な話ぶりに目を丸くして聞き入り、質問を浴びせていました。女性たちがセンターで出会い、知恵や情報を分かち合う。これがセンターの存在意義であるということが、よく分かりました。



人材育成センターに集まった女性グループと

★ ★ ★ これからの活動 ★ ★ ★

SOARSは、女性たちよりもフットワークの軽い青少年の育成に力を入れ、リーダーとなる青年たちによる地域の活性化を考えています。現在ニルマラさんが関わっている、政府と協働した調査を通して、全国の優れたNGOとネットワークができてつつあります。NGO強化のためのトレーニングを全国規模で実施したいと来年の抱負を熱く語ってくれました。

今回は、湘南六会で先進的なモデル地域づくりをリードしている堀さんが一緒だったので、話し合いの中で様々なアイデアが生まれ、人材育成センターの管理や女性グループの活性化に関する多くの提案をすることができ、実り多い調査ツアーでした。

★ ★ ★ ネパール調査報告会 ★ ★ ★

①日 時：12月10日(土) 14:00~16:00
場 所：地球の木事務所

★ ★

②カレーも味わいながら…

日 時：2006年1月21日(土) 11:00~13:30
場 所：ネスバ茅ヶ崎5F (JR茅ヶ崎駅下車徒歩1分)

会 費：800円 (昼食付き、資料代含む)

サリーの着付けも行います。

申 込：地球の木事務局

カンボジア

カンボジアの現状と日本のかかわり

10月中旬にカンボジアプロジェクトの現地パートナー、松本さんを招いて、チャイルドケアセンターや元気な子どもたちの様子、カンボジアの情勢などホットな情報を聞くことができました。

カンボジアは1992年国連の監視下で総選挙が行われ、それから13年、多くの国々が支援をしてきましたが、市場経済の急速な導入後、どのような状況にあるのでしょうか。1999年にASEANに加盟し法整備も行われつつありますが、貧富の差が広がり、治安も悪く農村の過疎化など課題も山積しているようです。現地在住14年の松本さんならではの話にみな聞き入りました。

一番驚いたことは、憲法や条例など法律ができていても、権力の上層部から末端の役人、警官までに汚職構造が広がっていることです。たとえば、乱獲による淡水魚の激減を防ごうとする漁民が、違法漁業の漁具や大きな仕掛けを撤去すると罰金が課せられ、違法漁業を



熱く語る松本さん

している企業などはおとがめ無しなのです。また交通事故の調書がすりかえられて被害者が補償を得られないなどのように、警官や軍人、役人が立場を利用して様々な犯罪の目こぼしをしています。お金で局長や村長の地位を売ったり買ったりしてその利権を使いたい放題使うということも平気で行われているそうです。経済援助とともに入ってきた市場経済の圧倒的

な流入が、国の中枢にいる首相や大臣にまでお金が第一で、公正・正義といったことをないがしろにする拝金主義をはびこらせてしまったようです。

そういう中で少数の心ある役人が何とか努力をして環境破壊を防ぎ、人々の人権を守ろうとしています。しかしカンボジア政府と日本政府の間で取り交わされる援助の流れも良き国づくりへと向かわず、利権をもたらす事業のリベートなどで、国の上層部に流れてしまうようです。主要道路が整備されると物の流通と人々の移動が自由になり、テレビ、映画などで得られる「豊かな」暮らしの情報はお金さえあればなんでも手に入るし、幸せももたらすという考えになります。それは伝統的な仏教的価値観や、倫理をしのぐものであり、年端の行かない少女たちの買春や、ドラッグの蔓延、大麻の栽培などといった暗い闇経済を浸透させ、新たな苦悩を人々に与えているようです。

多くの貧しい国では援助の名を借りた借金が膨らみ、その返済のために貴重な森林を伐採したり、単一作物を作って農地を荒らすこととなり、貧困がまた貧困を生み出しています。そうならないためには援助する側の国民の強い監視が必要です。「市民セクターが強くなることでしかこの悪循環を断ち切ることはできない」と松本氏は最後に述べられました。「カンボジアの市民もこのような状態をいつまでも放っておかないだろうが、日本の市民も自分たちの政府が何をしてしまっているのかよく見て声を上げて欲しい」ということでした。私たちがすべきことが見えてきたお話をした。

(カンボジアチーム 小泉 恵子)

※11月末に実施した現地調査の報告は次号に詳しく掲載する予定です。

バタンバン州のチャイルドケアセンター支援

ラオス

現地駐在員の報告会

6月7月8月と「ラオス概説」を読みながらの勉強会を終えて、9月21日JVCラオス駐在の名村隆行さんの帰国報告を聞きました。

テキストやインターネットに依る勉強は必要であり、みんなであれこれ話しながらやるのは、とても楽しいことでした。それは、私の中では、ラオスと自分とのつながりを捜すこと、アイデンティティの問題でもあり、他の人に話す時の根拠のようなものでしたから。とはいえ、地球の木ラオスチームとしては、隔靴搔痒、二階から目薬の感もありました。

名村さんの報告は、村の森林の権利を獲得するために森林委譲を進め、ラタンや沈香の非木材森林産物の栽培について、稲の収穫量を上げる為の堆肥、幼苗一本植えの技術、セメントリングで浅井戸の補修など、行政官にたいしては、ワークショップで村人の声を伝えたり、双方が共通認識を持てるようハンドブックを作るなど非常に具体的でした。また、ナムトゥン2ダムの問題では壊されてしまう巨大な環境、移住しなければならぬ村の暮らし、そこで活動してきたJVCとして、世銀、アジア開発銀行への働きかけが功を奏せず、工事が始まってしまったそうです。

いつも現実的、実際の観点が十八番の主婦たちとしては、うんうんそうだよねえと、それぞれがかつて訪ねたカムアン県の村に思いを馳せながら、ふかあく肯いたひとときでした。(ラオスチーム 久保田 由紀子)



地図で説明する名村さん

レポート 「横浜の里山を歩く」

10月16日、ラオスチーム主催のフィールドワーク「人にとって森や里山とは」に参加しました。NPO法人「山の自然学クラブ」の方から地球温暖化・森林保護についての話を聞いた後、金沢、柴、磯子区にまたがる広い緑地を歩きました。いかにも昔の人が使いこんだような山道が多く、むき出しになっている大木の根や谷戸の地層などを観察しながら、ラオスの森の民同様、里山と密接に暮らしていた私たちの先輩に思いを馳せました。

(広報チーム 斉藤 和子)

現地発

ラオス 買い物事情



誰でも外国で暮らすことになった人は同じだと思うが、最初は、とにかく前向きな気持ちで、多少のとまどいには「異文化生活なんだから、習慣が違って当たり前」と目をつぶる努力をする。しかし、やはり旅行と違って、「生活」となると、そんな努力も、息切れしてくるときがある。

私もそうだった。ラオスで暮らし始めた当初、市場で毎日の食材を買うためには、まずはラオス語を覚えるしかない。何しろ値札といふものが存在せず、すべての商品を、売り子さんと「それ1キロいくら？」と会話しながら買うのだ。でも、それに慣れてくると、日本のスーパーの、一言も会話を終る買い物が、いかに味気なかったか、という気もしてくる。

そうして周囲の人と話ができるようになって気づいたのは、「お金の話題」がやたらと多いことだ。これには参った。市場から袋を提げて帰る途中で出会った近所の人、袋の中身をくいとどきこんで「今日は何買ったの？ そのみかん1キロいくら？ そっちは？」という具合。それ以外にも、当時生活していた町にはほとんど外国人がいなかったせいで、みな私の持ち物に興味津々。コンタクトレンズっていくら？ 日本～ラオスの航空運賃は？ その服は？ その靴は？ そのフライパンは？ とにかく何でも値段を聞かれるのだ。公務員の月給が2、3千円ともいわれるこの国で、日本の物価で正直に答えるのはばかられ、なんとかお茶を濁すのに苦労した。

しかしよくよく見てみると、ラオス人同士でも、しょっちゅう、ものの値段を尋ねあっている。買い物袋の中の値段を逐一チェックされるのも私だけではなさそうだ。思うに、ラオスは、「情報」のほとんどが、会話で伝達されているのではないかと。日本は広告、雑誌、インターネットと情報があふれ、他人に尋ねる必要がない(従って会話の機会も減る)。それらが存在しないラオスでは、会話こそが唯一の情報源だから、話し好きにもなるのではないかと。

先日、日本に久しぶりに帰ったとき、新しい「慣習」に小さなショックを受けた。スーパーのレジで、ビニール袋の要らないお客様は、「ノー・レジ袋」という札をかごのなかにお入れください、というもの。ひとこと言えば済むことなのに、と感嘆してしまっただけで、やはり浦島太郎なのか……。

名村雅代 (在ラオス)

カムアン県 森林保全・自然農業支援

フィリピン

百聞は一見にしかず



ネグロスに帰ったラリーさんから、以下のような日本での感想が届きました。

私は初めて日本に行けると聞いたときは、とてもワクワクし、同時にまったく初めての土地でワークショップをすることに不安がありました。

日本に対して私が持っていたイメージは、お金持ちの国、高層ビルが立ち並び、大工場群があり、先進技術を持ち、生活水準が高い等々でした。

成田に着き、地球の木の会員の方々の家にホームステイし、日本の普通の家庭生活を体験して、日本人がどのような生活を送っているのかを少しずつ理解していきました。ホームステイしたことで、ワークショップのヒントが得られ、やる気も増し、大きな助けになりました。

特に、青少年のワークショップでは、名前ゲーム、意見の発表、話し合い、気持ちを出し合い表現することで、活発なワークショップになり、自分自身の希望や、将来の夢を話し合いました。その中で、お互いを思いやっていくのです。私にも、若者たちが様々な問題を抱えているのが見えてきました。自分のことで精一杯の様にもみえました。

日本の若者たちは、都市型の生活様式に影響を受け、忙しく、話す時間がとれず、通信機器を通じてしかコミュニケーションをとれず、テクノロジーや競争原理に依存し、自己表現する余地もなく全てが都市型の生活によって起こっているように思えました。しかし、ワークショップを体験した若者には、家族や地域・社会のことも視野に入れて、自分自身の多様な問題に答えを見つけてほしいと思います。

日本人が、時間をとても気にしているのが印象的でした。毎日大急ぎで仕事に行き、来る日も来る日も仕事です。バスも電車も職場も時間で動いている、多くのひとが仕事のために専念し自分自身のことも家族のことも考える時間がないかのようです。ネグロスでは時間どおりに、予定どおりにいかないことが多いのです。テクノロジーや器械は日本人に高度な生活水準をもたらしたでしょうが、それらに頼り過ぎないように願っています。人々は生命の自然の流れに立ち返る必要があるのではないのでしょうか。それが自然な姿です。

また、鎌倉訪問は私にとって大きな宝物になりました。日本の文化遺産の一つ、真の日本人の精神を見ました。

このような機会を与えてくださった方々に、心から感謝をし、これからも日本とネグロスの人たちが強固な絆を結んでくれることを願っています。ラリー・ギリエマ

彼は、日本での生活や鎌倉訪問、いろいろな年齢の人と会って、見て、言葉にできないほどのものを得て、ネグロスに帰っていったと思います。皆さんも実際にネグロスを是非見てほしいと思います。

1月12日からネグロスに行くツアーを企画しています。ぜひサリサリ・ハロハロな文化を体験し、一週間ネグロスの風に吹かれ、心も身体もリフレッシュしてきましょう。(フィリピンチーム 広瀬 康代)

※詳細は会報に同封のちらしをご覧ください。

レッツ・ゴー！ファミリープロジェクト



インタビューを受ける筆者

2005地球市民教育 日韓交流ワークショップに参加して



マジカルバナナ海をわたる!

今年6月横浜で、韓国の地球村市民学校のお母さんたちを迎えて開発教育のワークショップを行った。それを受けて今回、10月22日～23日の2日間、ソウルで、日韓両国の地球市民教育の現状やそれぞれの活動や教材を紹介、体験し、互いに学びあう機会がもたれた。日本からは地球の木6人（通訳2人を含む）、開発教育協会（DEAR）から3人が参加、韓国側はNGO地球村分かち合い運動のメンバーを中心に、お母さん達、教員、学生など約40名の参加があった。

日本側からはDEARが開発教育の考え方や、多文化共生のためのワークショップ「レヌカのまなび」を紹介し、韓国側は中学校での取り組みや、地球環境のワークショップを行った。又地球市民学校のお母さんたちが、実際に小学校で行っている「モンゴルの箱」ワークショップでは民族衣装を着てみたり、ボール紙でゲル（モンゴルの住居）を作ってみたりした。韓国ではまだ開発教育自体が新しい分野のせい、国際理解というとらえ方が主流のようで、日本からもっと学びたいという熱い思いが感じられた。メディアの関心も大きいのか、雑誌とラジオが取材していた。

地球の木では、学校だけに限らない様々な場面での地球市民教育活動について発表し、またマジカルバナナも海外デビューを果たしてきた。開発教育の新しい考え方に少し戸惑いも見られた韓国側だったが、マジカルバナナ自体は比較的入りやすかったのか、韓国流のノリのよさも手伝ってロールプレイもイキイキと演じ、又その後のグループの振り返りも活発に行われていた。

今回のワークショップでは日本人とは違う韓国流の反応が見られてとても興味深かった。例えば、意見を求めると皆さん率直な考えをどんどん発言する。日本ではロールプレイの中で多国籍企業が悪者に描かれているという批判もあるが、韓国では多国籍企業の横暴をもっと暴くべきだという意見もあった。

私にとっては初めての韓国。町を歩いても人々の顔、町並みなど「え！ここは外国？」と思ってしまうほど日本とよく似た風景なのだが、どこか懐かしく、そしてどこか違う（当然のことだが）、不思議な感覚があった。今回、志を同じくする日韓の人びとが互いに違いを認め合いながら、今後もつながっていけることを確信した貴重な体験であった。

（地球市民教育担当理事 中野真理子）

青少年ワークショップの企画・運営を手助けして

ラリーさん、また会いましょう。 俺もがんばって さらにいい男になる！

飯田 悟（地球の木ユースクラブ）



ワークショップを楽しむ筆者たち

今回ラリーさんは初来日で、地元以外でも初めてなど、いろいろ心配はあったけれど、参加者はのびのびとして、そして強い好奇心でいっぱいだった。

歌を作るワークショップはとても時間はかかったが、歌をがんばって完成させることができたことは満足という言葉では言い表せないくらい充実したものだ。みんなにとっても大きな自信に繋がったのではないだろうか。

彼のワークショップの内容は子どもでもできるくらい簡単なものであり、我々の年齢に即しているのかという不安や、気恥ずかしさがあるが、その裏には徹底して大事な目的が存在し、また、我々が発する何気ない軽口からも目的につなげるところがすごいと思う。こういう自由な雰囲気を作ることができるように是非なりたいと思う。

2000年にネグロスに行きついで以来、私も少しはこの目標に近づけたかなと感じた。でもまだまだ修行が足りないな。日々は精進だ。

特にワークショップで、彼が大事と考えているものは、個人の自立であり、その自立とは自分の主張をしっかりと持ち、それを正しく相手に伝える事であると感じた。また、相手のいろいろな感情を汲み取るからこそ相手を思いやる心が生まれるのではと思う。

今回、私たち青少年はラリーさんから自立の「種」を受け取ることができた。私はこの「種」を大事に「木」に育て、そして成長して「実」をつけ、そこから更に周りのたくさんの人にその「実」からできた「種」を分けてあげることができるようになりたいと思う。

共生の街サンフランシスコから



教材作りは楽しい♪♪ クラスメイトと(真中が筆者)

留学3年目、クラスに出て驚いた。運動競技場で行われるゴルフの授業で、ビーチサンダルを履いているのではないが…ふりふりスカートが3人。ひとりはパンツが見えそうなミニスカート。女性の私もうらやむほどの胸の谷間…。クラブを片手にりんごをかじっているし…。一瞬怒りがこみ上げてきた。「先生に対して失礼でしょうが！」これは私が年を取ったからなのか、それとも日本人だからこういうカジュアルな態度に慣れていないのか…。自分も教師であるからこそ、そうされたくはないと思うから強い反応がでてしまうのか…。

この体験を友達に話したところ、「アメリカの高校の水泳の授業で紺の競泳水着を着ていたら、女の子はビキニばかりだった」という話をしてくれた。また、ヨーロッパとアメリカで教育を受けた親友は、「要は、楽しんでできればいいと思ってるんじゃないかな？アメリカでは結果重視だし、どんな格好をするかは大切じゃないんだと思うよ。今の職場なんて、島の人には裸足で出勤してるしさ…」さすが、ソロモン諸島ガダルカナル島駐在員。これを聞いて笑えてきた。そうか、「こうあるべきだ！」と決めているのは私なんだ、と。これまで受けてきた教育に基づいて、これまでしてきた経験に基づいて、「これが当たり前」という基準を創っているのだ、と気づいた。住むところが違えば、文化も違い、求められる基準も違う。島国日本で生きてきた私が考える常識は決して世界の常識ではないんだ。それぞれの場所にそれぞれの規範がある。それらのことに柔軟に対応できる心が必要だと思う。「こうだ！」と決め付けていることの外側に自分が知らないことが沢山あるのだということを肝に銘じておきたい。

文化の違いで起こるこのような体験を伝えていくことが日本の外に出て多文化に触れる機会を与えられた私ができることかもしれないと思う。

乳井 暁絵 (在サンフランシスコ)

ヨッコのグローバル



eye

「ジュビリー2000」から 「ホワイトバンド」へ

今年9月、世界銀行と国際通貨基金(IMF)は、主要8カ国(G8)サミットの提案を受け、アフリカなどの最貧国の債務について全額削減することで合意しました。多くの途上国で、先進国からの借金がたまりにたまって、その返済のため、医療・福祉や教育など基本的な生活への予算が削られています。全額削減が実現すれば最貧国は借金地獄から抜け出せることになるでしょう。この決定には「ジュビリー2000」という、NGOや市民、労働組合などの世界的な連帯によるG8への猛烈な働きかけが功を奏しました。1990年アフリカのキリスト教団体が始まった「債務削減キャンペーン」は、2000年のミレニアム年に向けて「ジュビリー2000」となり、世界に広がりました。

ジュビリーとは、旧約聖書に記された「解放(安息)の年」に由来し、50年ごとの聖年に債務が帳消しになり、奴隷も解放されたということからきています。日本でも多くのNGOが賛同し、政府などへの働きかけを行ってきました。「地雷廃絶キャンペーン」と共に、新しい運動の形を作り上げたと言えるでしょう。より多くの人へ広がった現在のホワイトバンド「ほっとけない世界の貧しさキャンペーン」につながっています。

日本は世界最大の貸付国で、削減に最後まで反対していましたが、国内での調整がついたとして受け入れることになりました。

しかし2004年度でも政府開発援助(ODA)のうち借款(貸付)が45%となり、また全額削減といっても対象は18カ国、条件付ということで、最貧国の債務が全額削減され、自立するまでには時間がかかります。手を緩めることなく、連携していくことが必要です。

(横川 芳江)

活動報告(9月~11月抜粋)

- | | | | | |
|-----|-------|--|-----------|--------------------------------|
| 9月 | 7日 | 第5回理事会 | 17日 | マジカルシュガー教材作成ミーティング |
| | 15日 | 第3回ランチ連絡会 | 22日 | 小田原まつり(西湘ランチ) |
| | 19日 | ラオスシンポジウム「ラオスの未来と国際協力」 | 23日 | 戸塚フォーラムまつり(なんぶランチ) |
| | 20日 | マジカルシュガー教材作成ミーティング | 21日~24日 | 日韓地球市民教育交流(韓国「地球村分かち合い運動」訪問) |
| | 21日 | JVCラオス名村さん帰国報告会 | 26日 | 第4回ユースクラブ学習会「地球の木・フィリピンプロジェクト」 |
| | 24日 | 「ハーティー港南台」と交流会(なんぶランチ) | 29日・30日 | 横浜国際フェスタ2005(パシフィコ横浜) |
| | 25日 | 第3回ユースクラブ学習会「フィリピン」 | 30日 | 緑区民まつり(ほくぶランチ) |
| | 26日 | 県立港北高校出前講座「ネパール・タラー族の家族ゲーム」 | 29日~11月5日 | ネパール・プロジェクト調査ツアー |
| | 28日 | オープンオフィス・地球の木カフェ | 11月 | |
| 10月 | | | 6日 | 開成町文化祭(西湘ランチ) |
| | 1日・2日 | グローバルフェスタJAPAN2005(日比谷公園)
「マジカルバナナ」(フェスタのワークショップ企画) | 7日 | マジカルシュガー教材作成ミーティング |
| | 6日 | 第6回理事会 | 10日 | 第7回理事会 |
| | 12日 | 「るしな」代表松本さん カンボジア報告会(都筑公会堂)
第4回ランチ連絡会 | | エスニック料理交流会(西湘ランチ) |
| | 15日 | 「るしな」代表松本さん カンボジア学習会(事務所) | 12日 | 磯子国際交流フェスティバル(なんぶランチ) |
| | 16日 | ラオスフィールドワーク「森と里山と人と」
(横浜自然観察の森~金沢市民の森~円海山) | 12日・13日 | 大和市民まつり(県央ランチ) |
| | | | 13日 | 鎌倉国際交流フェスティバル(三浦ランチ) |
| | | | 16日 | 第5回ランチ連絡会 |
| | | | 19日~24日 | カンボジア・プロジェクト調査ツアー |
| | | | 25日 | 第5回ユースクラブ学習会「カンボジア」 |

2006年地球の木カレンダー好評発売中！
～あなたもカレンダーで国際協力を～



販売価格：
1,500円（税込み）
使用時サイズ：
56cm×41cm

JIC 2006 発行 環境 地球の木

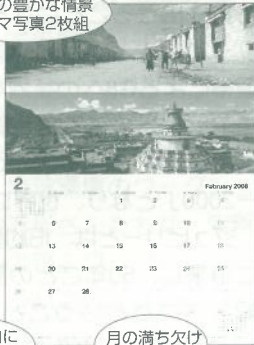
今年のテーマは「モンスーン・アジア」

アジアから陽が昇り、
アジアから目覚める。

21世紀の地球環境保護も
世界平和もすべてアジアから
始まる。

そうあって欲しいと願いを
込めて、アジアからの水と風
と土の便りを皆様へ届けます。
ご自宅用に、そして親しい
方へのプレゼントにもぜひ！

アジアの豊かな情景
パノラマ写真2枚組



日付は大きく
見やすい

予定など自由に
書き込みできる

月の満ち欠け
がわかる

オープン・オフィス「地球の木カフェ」

日 時：12月21日(水) 11:00～18:00
場 所：地球の木事務所

年末のひと時、忘年会を兼ねて地球の木事務所へ遊び
に来ませんか？ラオス、ネパール、カンボジアの新しい
グッズも入荷しています。韓国訪問や支援地調査ツアー
の写真もどうぞご覧ください。チラシのチケットで飲み
物一杯無料サービス！地球の木カレーや手作りお菓子も
どうぞ。みんなでワイワイこの一年を振り返りましょう。

「ほっとけない世界のまじしさキャンペーン」継続中

ホワイトバンド(300円)は引き続き、地球の木事務所
で販売しています。地球の木での売上は支援地の一つ、
カンボジアのチャイルドケアセンターの支援に使われま
す。「ほっとけない！」あなたの声を示しましょう。

情報メールマガジンAsian Windと会員メールリングリ
ストにご登録ください

新鮮な情報を満載したAsian Windは月2回お届けして
います。会員以外の方もご購入いただけます。一方、会
員メールリングリストは地球の木会員の情報・意見交換、
交流の場です。ご希望の方はどちらも地球の木事務局、
chikyunoki@e-tree.jpまでメールをお送りください。

書き損じ葉書・未使用切手募集

皆さんからご寄付いただいた未使用切手は10月末現在
で16,984円となりました。書き損じ葉書も募集していま
す。年賀状などで生じた書き損じ葉書など、ぜひ地球の
木にご寄付ください。

パキスタン大地震
緊急救援募金のお願い

インド、パキスタンにまたがるカシミール地方を
中心に大きな被害をもたらした大地震は多くの死
傷者を出し、被災者の数も計り知れません。

厳しい冬を迎え、仮
設住宅の建設が急が
れるとともに、衛生
環境の整備が求めら
れています。

この地震被災者へ
の皆さまの暖かい募
金をお願いします。



口座名：00260-5-14129
加入者名：特定非営利活動法人 地球の木
「パキスタン」とお書き添えください。

プロジェクト支援
年末募金キャンペーンのお願い

今年の年末募金は、「ラオス村人支援募金」「ネ
パール・デブラニ募金」です。

スマトラ募金の報告

4月以降、皆様からお寄せ頂いた募金163,095円
はスリランカのジャフナ県マナカドウ村の自立支
援、乾燥魚プロジェクトへの支援金として送金い
たしました。

フィリピン・ネグロス島
お母さんツアー参加者募集！

バナナ産地訪問・支援地の農家ホームステイ・
バコロドの消費者の女性と料理交換会などをしま
す。現地コーディネーターはJCNC現地駐在員で『ネ
グロス・マイラブ』の著者、大橋成子さんです。

期 間：1月12日(木)～18日(水)
参加費：16万円
募集締め切り：12月15日(木)

ネパールYOUTH交流スタディーツアー
参加者募集！

若者対象のスタディーツアーです。支援先
SOARSの人材育成センターに泊まり、地域の女
性やユースクラブのメンバーと交流します。ネパ
ールの状況やNGOの活動を学び、若者同士で語り
合い、自分の生き方やライフスタイルを真剣に考
えてみませんか？

期 間：2006年2月12日(日)～19日(日)
参加費：22万円(学生21万円)
この他手続き諸費用がかかります
説明会：2005年12月17日(土) 14:00～

地球の木事務所
事前学習会：2006年1月29日(日)、2月4日(土)

募集締め切り：2006年1月13日(金)
定員になり次第締め切ります

★ボランティア募集！
発送作業、イベント手伝いなど



詳細は会報「同封のチラシ」をご覧ください。